

狐塚遺跡 II

筑後市大字上北島所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第 77 集

2007

筑後市教育委員会

きつね づか い せき
狐 塚 遺 跡 II

2007

筑後市教育委員会

序

この報告書は、集合住宅建設に伴って平成18年度に行なった、発掘調査の成果をまとめたものです。当遺跡は、昭和44年度に九州大学の鏡山猛先生を中心に発掘調査され、当地方の弥生時代末から古墳時代初頭にかけての土器様相の変化を理解しようと試みられた遺跡として、著名なものです。

今回の発掘調査では、前回の調査では知られていなかった中世の遺構の存在も明らかになり、新しい地域史的一面を垣間見ることができました。本書が地域の歴史解明や、文化財愛護に活用されれば、望外の喜びです。

最後になりましたが、現地での発掘調査から本書の刊行に到るまで、御助力御協力いただいたみなさまに、厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

筑後市教育委員会
教育長 城戸一男

例　言

1. 本書は、筑後市教育委員会が平成18年度に実施した孤塚遺跡第2次調査の成果を収録したものである。
2. 発掘調査および出土遺物の整理等は筑後市教育委員会がおこなった。調査関係者は第Ⅰ章に記したとおりである。なお、出土遺物・実測図・写真等は筑後市教育委員会で収蔵・保管している。
3. 本書に使用した図面のうち、遺構実測図は永見秀徳が、遺物実測図は、仲文恵、横井理絵（元興寺文化財研究所）が作成した。また、製図は、仲、横井、永見が行なった。
4. 本書に使用した写真は、遺構写真および遺物写真を永見が撮影したが、全体写真等は尙空中写真企画に委託した。
5. 本書での報告にあたり、遺構番号を次のように決定した。調査時につけた遺構仮番号を生かし、頭に調査次数、遺構種別を加えた。今回は第2次調査であるため、S-1が溝である場合、2SD01となる。
6. 本書に用いた方位はすべてG.N.を、水準はT.P.を基準としていて、座標は第Ⅱ座標系に属している。また、座標値は世界測地系（測地2000）によった。なお、遺構の主軸等の方位は実測図上で分度器を用いて計測した。北から45°東にあたる場合、N-45°-Eと表記した。
7. 本書の執筆および編集は永見が行なった。

目　次

第Ⅰ章　はじめに	1
第Ⅱ章　位置と環境	3
第Ⅲ章　調査成果	5
第Ⅳ章　まとめ	13

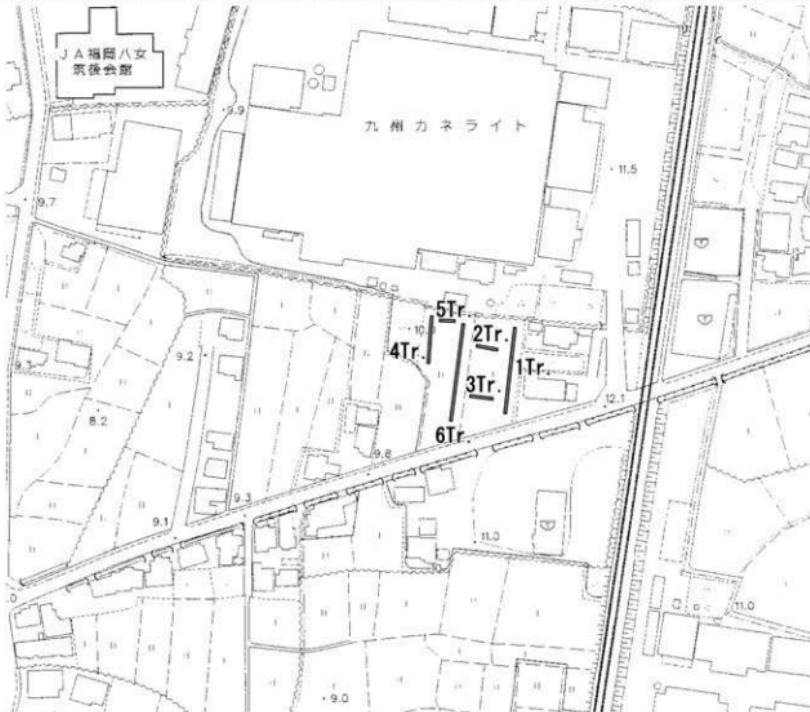
第Ⅰ章 はじめに

本書は、平成 18 年度に実施した孤塚遺跡第 2 次調査の成果を収録したものである。この調査は、集合住宅新築工事によって消滅する部分について記録保存の措置をとったものである。

平成 17 年度に、建築主から筑後市教育委員会に対して、当該地が埋蔵文化財包蔵地か否かの照会がなされた。筑後市教育委員会では、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地（孤塚遺跡）内であることを回答し、着工前に埋蔵文化財発掘の届出が必要であることと、それに先立って確認調査の必要があることを通知した。

この回答を受けて建築主は筑後市教育委員会に試掘・確認調査を依頼した。調査の結果、敷地全体に遺構が存在することが明らかとなり、建物敷地部分は工事によって破壊されるため、現在の工事内容では工事着工前に記録保存のための本調査が必要であることを回答した。協議の結果、工法の変更は不可能で、建物敷地部分は遺構の破壊が免れないこととなった。そのため、当該部分のみ記録保存のための本発掘調査を実施し、係る費用は建築主が負担することで合意した。

しかしながら、本調査は平成 17 年度中に取りかかることができない状況であったので、平成 18 年度のできるだけ早い時期から取り掛かることで、協議が整った。そこで平成 18 年度当初に埋蔵文化財



発掘調査委託契約を締結し、平成18年4月11日から調査に着手した。5月の連休を挟み、5月末日まで現地の調査を完了した。

出土遺物の整理と報告書刊行作業は、現地の調査完了後に着手し、平成19年3月31日までの期間で実施した。作業のうち、遺物洗浄、遺物接合、遺物実測、遺物復元、製図の各作業は財団法人元興寺文化財研究所に委託した。

また、調査体制は以下のとおりであった。

総括	筑後市教育委員会	教育長	城戸 一男
		教育部長	平野 正道
庶務		社会教育課長	田中 僚一
		文化スポーツ係長	北島 鈴美
		文化スポーツ係	小林 勇作（文化財専門職）
			上村 英士（　々　）
			阿比留土朗（文化財学芸員）
調査担当		文化スポーツ係	永見 秀徳（文化財専門職）

なお、現地での調査から報告書刊行に到るまで、以下の方の御指導御助言を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

水野正好（前：奈良大学）、佐田茂（佐賀大学）、岸本圭（福岡県教育庁）、大塚恵治（八女市教育委員会）、片岡宏二（小郡市教育委員会）

第Ⅱ章 位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の南西部にあたる。市域をJR鹿児島線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜め池が点在する。低位扇状地である東部や低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畠、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中央部に形成されている。



Fig.2 周辺主要遺跡分布図 (1/50,000)

まず旧石器時代であるが、蔵敷坂口遺跡や鶴田東大坪遺跡等で遺物が出土している。しかしながら、遺構の発見には到っていないため、当時の様相はほとんど不明である。つづく縄文時代であるが、筑後市内では縄文時代の遺跡は市の南部域に集中することが判っている。ただし、例外的に落し穴は全域に分布する。特に鶴田岸添遺跡や久恵内次郎遺跡では、多数の落し穴を検出している。また、津島九反坪遺跡・志前田遺跡・鶴田岸添遺跡・久恵中野遺跡等では、早期のものと思われる石組炉も発見されている。さらに、尾島集落の北側には縄文時代の集落として著名な裏山遺跡がある。

次の弥生時代であるが、中期初頭までの集落は、縄文時代と同様に市域の南半部に偏って分布する傾向が強い。中期も後半に入ると、北部の丘陵上や南部の低平地へも展開して遺跡数は爆発的に増加する。前期から中期初頭の遺跡では、常用長田遺跡や常用日田行遺跡等が著名で、前期の溜井も津島九反坪遺跡で確認されている。中期後半以降の集落は、蔵敷森ノ木遺跡が特に著名である。また、低平地への展開例では津島皿ヶ町遺跡がある。また、鶴田岸添遺跡では火災で消失した竪穴住居も確認されている。

古墳時代は、市北部の石人山古墳、欠塚古墳、瑞王寺古墳が良く知られている。集落遺跡では、弥生時代から継続している蔵敷森ノ木遺跡や久富鳥居遺跡、鶴田西畠遺跡、津島南佛生遺跡等がある。集落の基本的な立地は、弥生時代後半のそれを踏襲する。

筑後市域は、古代には交通の要衝として認知されていたようで、古代官道の西海道が南北に縱断する。発掘調査でも、鶴田中市ノ塚遺跡、山ノ井川口遺跡、羽犬塚山ノ前遺跡、山ノ井南野遺跡等で確認された。延喜式にある葛野駅は筑後市附近にあったと考えられていて、最有力候補地は羽犬塚中学校附近である。羽犬塚中道遺跡では「□郡符葛□」と墨書きされた土師器も出土している。また、若菜森坊遺跡では竪穴式住居によって構成される大規模な集落が確認されている。

中世には、館跡を中心に調査事例が増加している。この時期には社寺領を中心に莊園が発達し、その支配を基盤にした社会が形成される。これは当地域の特徴のひとつといえよう。具体的には、市域の北半部から隣町の広川町にかけて熊野領の広川荘が成立し、その中心は筑後市の熊野であった。また市の南東部には郡名莊である上妻莊があり、南西部には安楽寺領の水田莊・下妻莊が成立する。水田莊の中心には老松宮（のちに水田天満宮）が置かれ、それを中心に水田六院が栄えた。

これら莊園の境界附近には、屋敷や坊といった小字名が残り、対峙する各莊園が配した屋敷地であるとみることができる。長崎坊田遺跡や、若菜森坊遺跡、井田西中野遺跡などがこれにあたる。

近世には、在郷町がつくられ、特に羽犬塚町は宿町とも呼ばれ栄えた。有馬藩の三宿に数えられ、御茶屋が置かれるなど、発展を遂げた。また、農村集落の事例として四ヶ所古四ヶ所遺跡もある。

転じて、狐塚遺跡の周辺を見てみたい。南西側 150 m には上北島塚ノ木遺跡がある。夜白式土器を出土していて、狐塚遺跡および周辺遺跡では最も古い段階の遺跡である。また西側 200 m には上北島花畠遺跡があり、古墳時代と思しき竪穴住居を確認している。凡そこの範囲が狐塚遺跡を中心とする集落の範囲ではないかと考えられるが、さらに北側には井原口遺跡も展開しており、比較的広い範囲を時期によって集落の中心が移動した可能性も否定できない。

参考文献

『筑後市史』 筑後市史編纂委員会 1998

第Ⅲ章 調査成果

狐塚遺跡第2次調査は、集合住宅の建設に先立ち、記録保存を目的として実施したものである。今回の調査区は、弥生時代終末から古墳時代初頭の土器様式の変遷を理解しようと昭和44（1969）年に実施された、狐塚遺跡の調査地点の南側にある。当然、当該期の竪穴住居跡ならびに関連遺構の検出を期待していた。調査に取り掛かってみると、先述したような遺構は2基のみであったが、今まで知られていなかった中世の遺構が検出されたりした。

調査対象面積は、約 500 m²で、調査は永見が担当した。

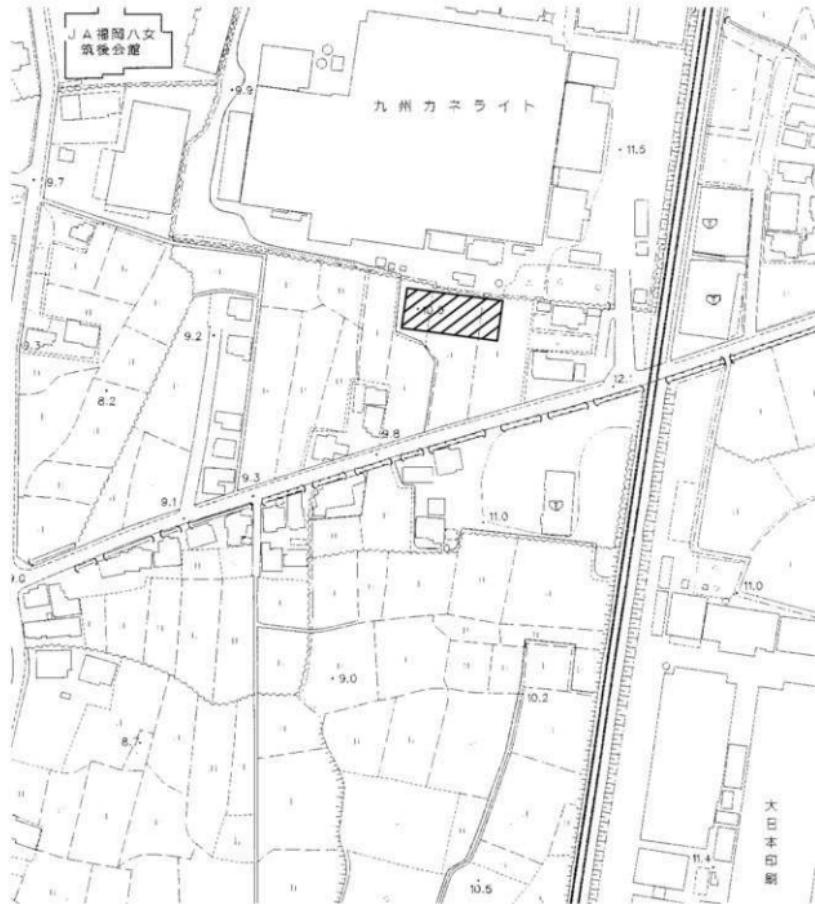


Fig.3 調査地点位置図 (1/2,500)

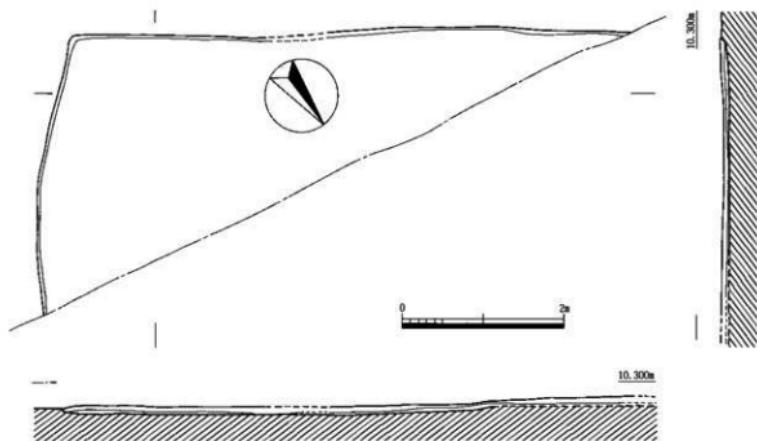


Fig.4 2SI05 実測図 (1/60)

遺構

遺構を概観すれば、古墳時代のものと中世のもの、時期不明のものに分かれるようである。報告では敢て時代別には報告せず、遺構種別・遺構番号順での報告を基本とした。ご了解願いたい。

竪穴住居

2棟を検出した。1棟は一部を別遺構に破壊され、もう1棟は大半が調査区外となっている。そのため検出した2棟ともに、全体の規模が不明となっている。以下、遺構別に報告する。

2SI05 (Fig.4, Pla.2)

調査区の北西に位置していて、大半は調査区外となる。東西方向の辺長は7mを超えていて、大型の竪穴住居であるといえるが西辺が調査区外であるため、規模が確定できない。南北方向は、調査区内で最大3.5mを測るが、北辺が調査区外であるため、こちらも規模を確定できない。検出時点で削平を激しく受けている、深さは0.1mを測るのみであった。主軸の方位は、N-53°-Wである。

また、竪穴内部の床面を精査したが、主柱穴や屋内土坑など、竪穴住居に付随する施設は何ら検出されなかった。

出土遺物は、認められなかった。

2SI10 (Fig.5, Pla.3・4)

調査区の北端に位置する。東側の短辺を2SD01に切られている。したがって東西方向の長軸は法量が確定しないが、凡そ4.7m程度であろう。南北方向の短軸は4.8m深さ0.2mを測る。主軸の方位は、N-10°-Eである。

主柱穴は4本認められ、竪穴の南西側の隅にのみベッド状遺構が認められる。柱穴の床面からの深さは、(a)が0.3m (b)が0.4m (c)が0.2m (d)が0.2mである。主柱穴は直交軸を採用していて、柱穴間の距離は1.3mほどで統一されている。またベッド状遺構は南北1.0m東西1.3mの規模で、床面からの高さは、0.1mである。竪穴には幅0.1mの壁小溝がベッド状遺構の部分も含めて巡っていて、その深さは0.05m乃至0.15mを測る。竪穴の南辺中央には、屋内土坑が付設されていて、その規模は

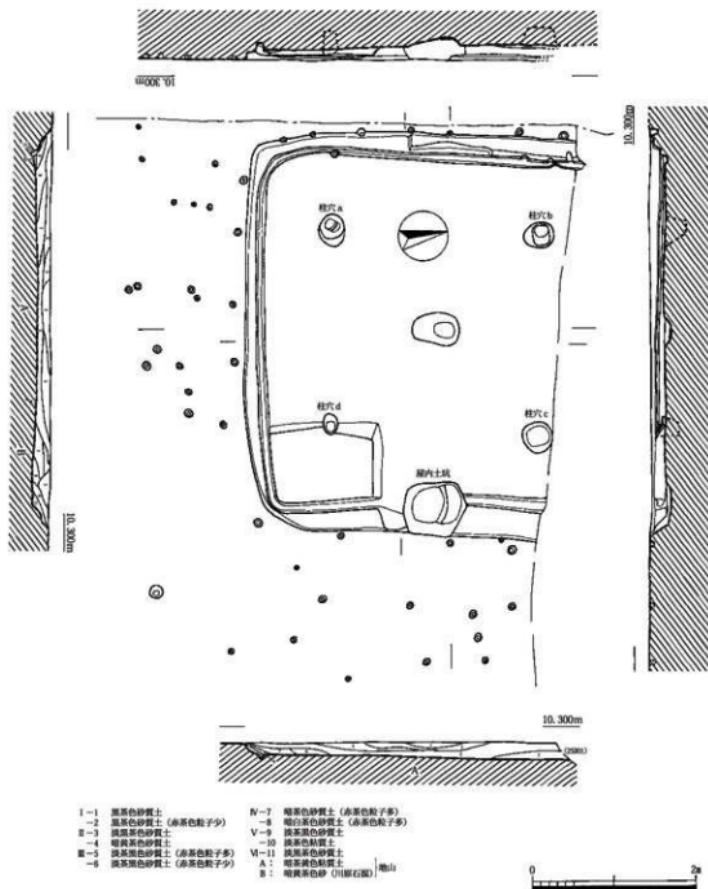


Fig.5 2SI10 実測図 (1/60)

南北0.6 m東西0.8 m、床面からの深さは、0.2 mである。

また、竪穴の周辺には杭痕と思しき小穴が認められる。これらの小穴は、概ね径が0.1 mで深さ0.1 m程度残存していた。小穴は竪穴の縁に沿って穿たれた1列と合わせて、おおまかに3列ほどに大別できそうである。

土層断面の観察からは、竪穴が一定程度自然埋没した後に廃棄に伴う埋没があったことが看取された。土層体積状況および出土遺物の観察から、V層とVI層は住居廃絶直後の雨水等による自然埋没でI層からIV層は生活廃棄行為による埋没と見られる。

出土遺物は、土師器(甕・高壺・鉢)がある。

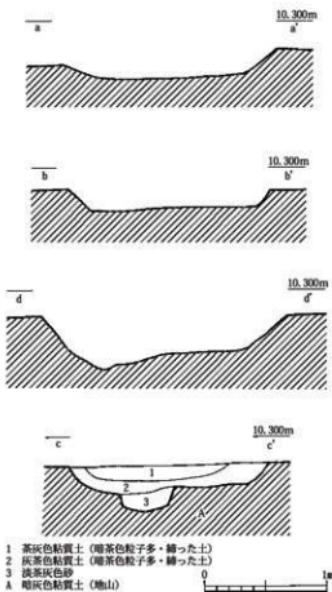


Fig.6 2SD01 実測図 (1/40)

溝状遺構

溝状遺構は、1条を確認した。

2SD01 (Fig.6, Pla.5)

調査区中央部をほぼ南北に走っている。南側ではN-01°-Wの方位となるが、北側では東側に曲がり、調査区北端附近ではN-13°-Eの方位をとる。深さは調査区北端で0.2m南端で0.4mを測るが、調査区の中央部では、0.15mと浅くなっている。この付近は地山に川原石様の礫が多量に混じっていて非常に硬いため、掘削を中途で諦めたように見える。また、南端部は底面をさらにもう一段掘り込んでいる。

出土遺物は、土師器（土鍋）・陶器（甕）・青磁（碗）がある。

竪穴状遺構

検出時点では風倒木かと考えたが、遺構となる可能性のあるものは土層断面を観察の上、完掘した。この項では、これらのものを竪穴状遺構として報告する。

2SX02 (Fig.7, Pla.6)

調査区の南に位置している。南北1.9m東西2.1m深さ0.4mを測る。底面は、南北1.0m東西1.0mの平坦面を形成している。遺構の形状は縄文期の竪穴に似るが、埋土の土層観察の限りでは、人為的な遺構ではなく風倒木痕の可能性が高い。

出土遺物は認められなかった。

2SX03 (Fig.7, Pla.6)

調査区の中央西寄りに位置している。南北2.7m東西3.0m深さ0.5mを測る。底面は、南北1.0m東西1.4mの平坦面を形成している。全周を囲むように棚状の段が形成される。遺構の形状は縄文期の竪穴に似るが、埋土の土層観察の限りでは、人為的な遺構ではなく、風倒木痕の可能性が高い。

出土遺物は認められなかった。

2SX04 (Fig.7, Pla.6)

調査区の南西寄りに位置している。南北2.2m東西2.1m深さ0.5mを測る。底面は、南北1.5m東西1.3mの平坦面を形成している。東から南にかけては棚状の段がある。遺構の形状は縄文期の竪穴に似るが、埋土の土層観察の限りでは、人為的な遺構ではなく、風倒木痕の可能性が高い。

出土遺物は認められなかった。

2SX06 (Fig.7, Pla.6)

調査区の東端に位置している。南北1.9m東西2.0m深さ0.4mを測る。底面は、南北0.9m東西1.0mの平坦面を形成している。2SX04と同じく、東から南にかけては棚状の段がある。遺構の形状は縄文期の竪穴に似るが、埋土の土層観察の限りでは、人為的な遺構ではなく、風倒木痕の可能性が高い。

出土遺物は認められなかった。

2SX07 (Fig.7, Pla.6)

調査区の西寄りに位置している。南北2.3m東西2.1m深さ0.4mを測る。底面は、南北1.8m東西1.2mの平坦面を形成している。南北両端に棚状の段を形成し、杭痕様の小穴も認められる。遺構の形状は縄文期の竪穴に似るが、埋土の土層観察の限りでは、人為的な遺構ではなく、風倒木痕の可能性が高い。

出土遺物は認められなかった。

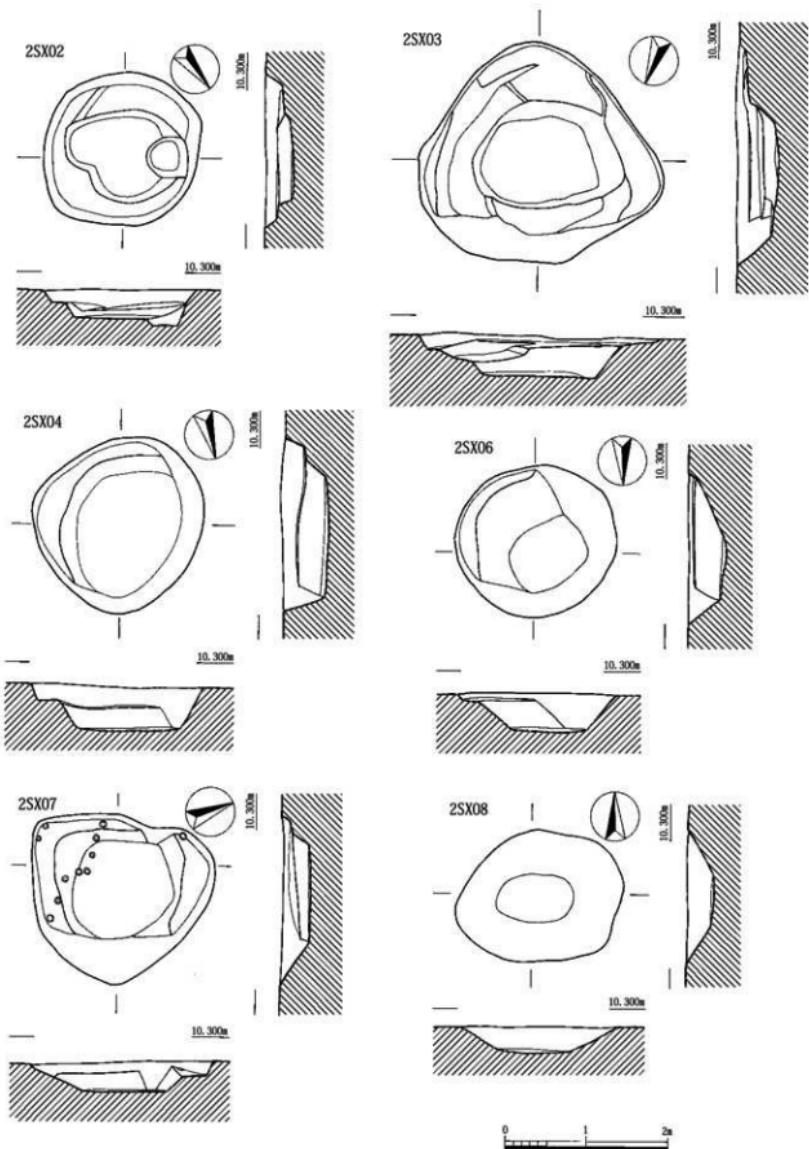


Fig.7 竪穴状遺構実測図 (1/60)

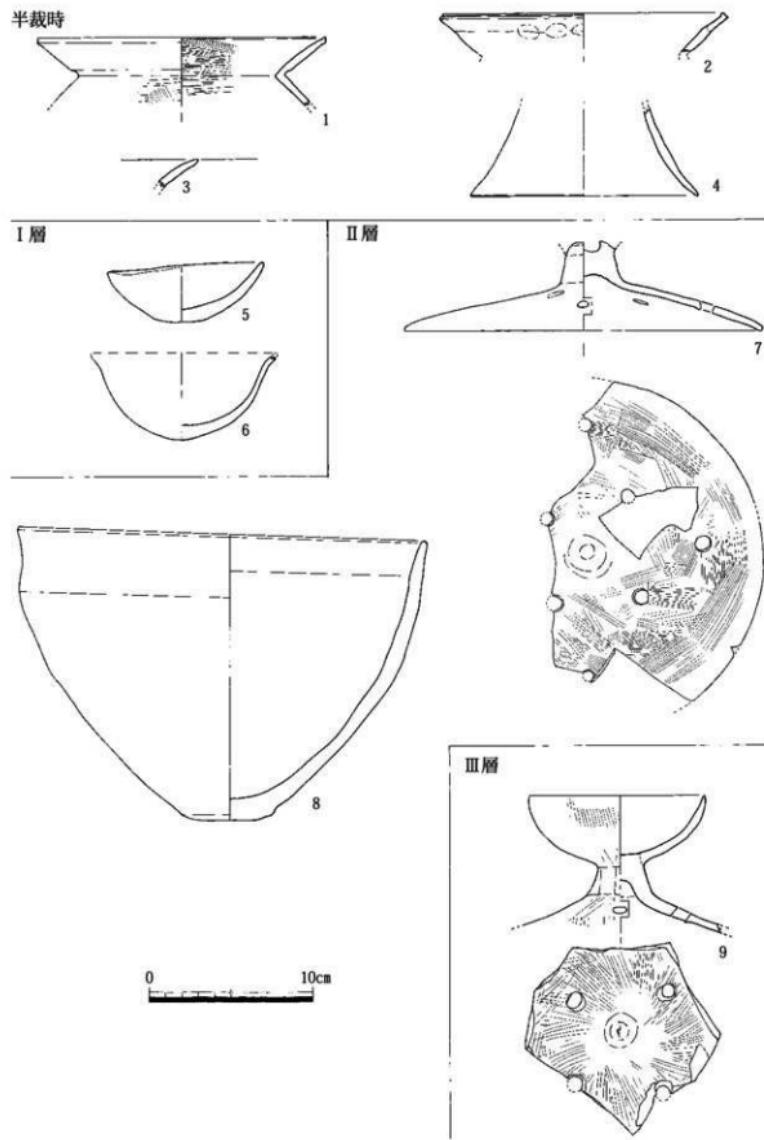


Fig.8 2SI10 出土遺物実測図① (1/3)

2SX08 (Fig.7)

調査区の中央附近に位置している。南北1.6m東西2.1m深さ0.3mを測る。底面は、南北0.6m東西0.9mの平坦面を形成している。遺構の形状は縄文期の竪穴に似るが、埋土の土層観察の限りでは、人為的な遺構ではなく、風倒木痕の可能性が高い。

出土遺物は認められなかった。

出土遺物

今回の調査では、竪穴住居跡を中心にパンコンテナー1箱分の遺物が出土した。以下、遺構ごとに報告したい。なお、遺物の詳細については出土遺物観察表によつていて、本文には観察表で表現しきれない部分や、特徴的な部分を中心に記載した。したがつて、本文中では詳しく触れない遺物もあるので注意されたい。

2SI10出土遺物 (Fig.8・9, Pla.7)

土師器と磨り石を報告する。1～4は半裁時出土である。1～3は甌である。布留系の甌である。特に1と2の口縁部は特徴的である。4は高环の脚部である。

5と6は、I層から出土した土師器の鉢である。いずれも小型品で丸底を呈する。

7と8はII層からの出土である。7は高环の脚部である。脚部は低く、裾は大きく広がっている。裾部には7箇所の焼成前穿孔が認められ、その配置から元来は8箇所であったと推測される。庄内系椀型高环の脚部と見てよい。8は土師器の鉢である。底部は僅かに凸レンズ状を呈する平底で、口縁部は一旦内側に若干窄まってから僅かに外反する。所謂大型鉢の範疇と見て良かろう。

9は、III層から出土した土師器の高环である。环部は椀の形状を呈し、脚部は短く、裾は大きく広がっている。裾部には4箇所の焼成前穿孔が認められるが、8-7の例をみると全体では8箇所あった可能性が高い。この高环も、庄内系椀型高环と見てよい。

10は、IV層から出土した安山岩製の磨り石と思われる。2箇所に使用痕と思しき擦痕が認められるが、その範囲は限定的である。

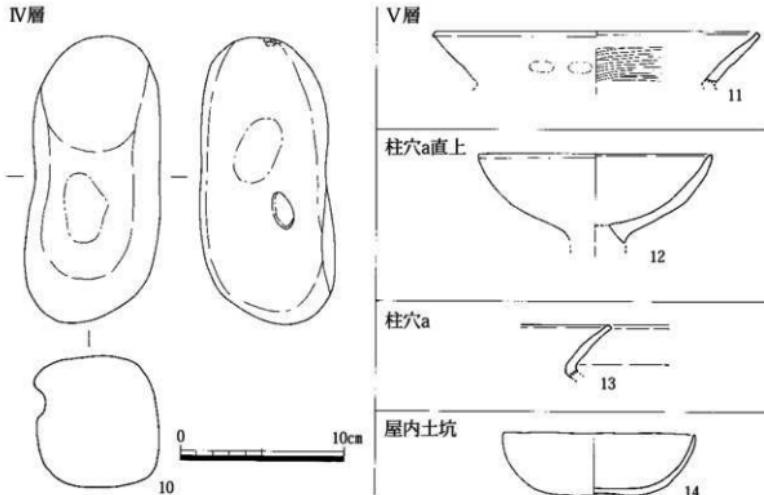


Fig.9 2SI10出土遺物実測図② (1/3)

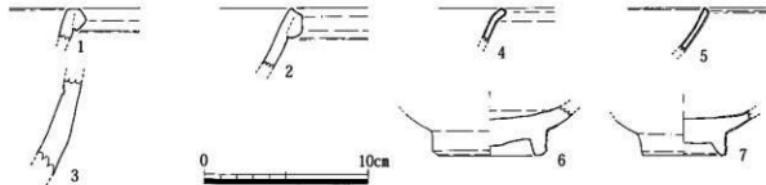


Fig.10 2SD01出土遺物実測図 (1/3)

11は、V層から出土した土師器の甕である。口縁部のみの資料で、口縁部外面に指頭圧痕が見られ、口唇部は上方につまみ出している。布留系の甕と見て大過なかろう。

12は、柱穴aの直上で出土した土師器の高杯である。出土層位では、IV層にあたると思われる。椀型の环部を持つもので、所謂内系椀型高杯と見てよい。

13は、柱穴aから出土した土師器の甕である。口縁部のみの資料で、口唇部は上方につまみ出している。布留系の甕と見て大過なかろう。

14は、屋内土坑から主として出土した土師器の鉢である。丸みを帯びた器形であるが、底部は緩やかに平坦面を形成する。全体に器壁は薄い。

2SD01出土遺物 (Fig.10, Pla.7)

土師器と陶器、青磁を報告する。すべて、半裁時出土したものである。1と2は土師器の土鍋で、口縁部が玉縁状を呈するものである。3は陶器の甕で、体部の細片である。備前焼と思われる。4～7は竜泉窯系青磁の碗である。4と5は口縁部の資料で、4は小さく外反する口縁部を持ち、5は緩やかに内湾する口縁部を持つ。6と7は底部の資料である。

Fig.	No.	遺物番号	形状	断面	口径	底径	厚さ	高さ	内径	外径	色調	筆記	有孔部分	地質	口縁部の特徴	備考	寸法
1	1	2SD01-001	土鍋	口縁	37.3	11.5	1.5	11.5	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底、茎付多	直井	内系	2SD01層内に発見される	3
2	2	2SD01-002	土鍋	口縁	37.0	11.5	1.5	11.5	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付多	直井	内系	2SD01層内に発見される	3
3	3	2SD01-003	土鍋	口縁	33.8	11.5	1.5	11.5	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付多	直井	内系	3	
4	4	2SD01-004	土鍋	口縁	34.8	11.5	1.5	11.5	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	中井	内系	3	
5	5	2SD01-005	土鍋	口縁	36.0	11.5	1.5	11.5	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
6	6	2SD01-006	土鍋	口縁	31.8	11.5	1.5	11.5	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
7	7	2SD01-007	土鍋	口縁	31.8	11.5	1.5	11.5	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
8	8	2SD01-008	土鍋	口縁	31.8	11.5	1.5	11.5	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
9	9	2SD01-009	土鍋	口縁	31.8	11.5	1.5	11.5	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
10	10	2SD01-010	土鍋	口縁	31.8	11.5	1.5	11.5	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
11	11	2SD01-011	土鍋	口縁	30.0	11.5	1.5	11.5	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
12	12	2SD01-012	土鍋	口縁	30.0	11.5	1.5	11.5	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
13	13	2SD01-013	土鍋	口縁	30.0	11.5	1.5	11.5	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
14	14	2SD01-014	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	2SD01層内に発見される	3
15	15	2SD01-015	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
16	16	2SD01-016	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
17	17	2SD01-017	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
18	18	2SD01-018	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
19	19	2SD01-019	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
20	20	2SD01-020	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
21	21	2SD01-021	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
22	22	2SD01-022	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
23	23	2SD01-023	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
24	24	2SD01-024	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
25	25	2SD01-025	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
26	26	2SD01-026	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
27	27	2SD01-027	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
28	28	2SD01-028	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
29	29	2SD01-029	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
30	30	2SD01-030	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
31	31	2SD01-031	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
32	32	2SD01-032	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
33	33	2SD01-033	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
34	34	2SD01-034	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
35	35	2SD01-035	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
36	36	2SD01-036	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
37	37	2SD01-037	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
38	38	2SD01-038	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
39	39	2SD01-039	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
40	40	2SD01-040	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
41	41	2SD01-041	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
42	42	2SD01-042	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
43	43	2SD01-043	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
44	44	2SD01-044	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
45	45	2SD01-045	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
46	46	2SD01-046	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
47	47	2SD01-047	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
48	48	2SD01-048	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
49	49	2SD01-049	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
50	50	2SD01-050	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
51	51	2SD01-051	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
52	52	2SD01-052	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
53	53	2SD01-053	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
54	54	2SD01-054	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
55	55	2SD01-055	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
56	56	2SD01-056	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
57	57	2SD01-057	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
58	58	2SD01-058	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
59	59	2SD01-059	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
60	60	2SD01-060	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
61	61	2SD01-061	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
62	62	2SD01-062	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
63	63	2SD01-063	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
64	64	2SD01-064	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
65	65	2SD01-065	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
66	66	2SD01-066	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
67	67	2SD01-067	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
68	68	2SD01-068	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
69	69	2SD01-069	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
70	70	2SD01-070	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
71	71	2SD01-071	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
72	72	2SD01-072	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
73	73	2SD01-073	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
74	74	2SD01-074	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
75	75	2SD01-075	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
76	76	2SD01-076	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
77	77	2SD01-077	土鍋	口縁	31.7	3.5	6.5	11.7	11.5	11.5	茶褐色	■	白色底付、白色脚	直井	内系	3	
78	78	2SD01-078	土鍋	口縁</													

第IV章 まとめ

冒頭にも述べたとおり、孤塚遺跡は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての土器様相の変化を追及した調査が行われた遺跡として、つとに有名である。今回の調査では、古墳時代初頭のものと思しき竪穴住居と中世の所産と見られる溝を検出した。また、詳細は不明ながら竪穴状遺構も検出している。ここでは、遺構の種類別にこれらを取り上げ、出土遺物についても若干の考察を加えてみたい。

竪穴住居

今回の調査では2棟を確認したが、まず2SI05を取り上げる。この竪穴住居は、遺存状況が非常に悪く竪穴の深さは0.1m程しか残っていなかった。そのため、出土遺物も認められず、時期については不明であると言わざるを得ない。しかしながら、第1次調査の成果（註1）や2SI10の時期を考えると、やはり弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期を推定することができる。また、今回の調査では主柱穴を確認していないことに注目したい。このことは、この竪穴住居が4本柱ではなく2本柱である可能性が高いことを示している。当地域の竪穴住居は、円形から方形へ移行した時点では主柱穴が2本柱で、古墳時代に入って4本柱に移行することが通例であるから、敢えて時期比定をするならば弥生時代終末期の所産である可能性が最も高いといえる。

また、長軸が7mを超える大型の竪穴住居であることが最も目を引く。大型の竪穴住居は、近隣では大牟田市宮部遺跡の弥生時代後期例が著名である（註2）が、通常の大きさの竪穴住居と混在する点が注目される。即ち、大型の竪穴住居のみで構成される集落が存在するのではなく、通常の大きさの竪穴住居で構成される集落の中に混在する形で集落を形成しているのである。今回の孤塚遺跡の事例を見ても、第1次調査および今回の第2次調査をみると、通常の大きさの竪穴住居が多数検出されている。そうした意味で、ある時期の盟主的な住居である可能性を指摘しておきたい。集落内での集会所的な性格を考えるむきもあるが、やはり、集落の盟主的な存在と理解するほうが自然であろう。（註3）

次に、2SI10を取り上げる。この竪穴住居からは布留系および庄内系の土器が出土し、最上層から柱穴内出土遺物まで殆ど時期差が認められない。したがって、住居廃絶から完全埋没までの時間はきわめて短かったことが看取される。押しなべて布留I式平行期の範疇で捉えて大過ないと思われる。

住居の構造としては、主柱穴が直交軸を採用した4本柱となって古墳時代的な様相を呈する一方、小さなベッド状遺構が付設されて弥生時代的な要素も残る。中央部に小土坑を配置するが、炭化物等の出土はなく炉となる可能性は低い。またベッド状遺構の部分も含めて壁小溝が巡り、壁構造を持っていたことが伺える。さらに竪穴に沿って杭孔と思しき小穴列も確認されることから、竪穴内部の壁小溝と竪穴外部の杭列で土を挟み込む構造の壁であった可能性も否定できない。

さらに、住居の周囲には杭孔と思しき小穴列がもう2列確認できる。竪穴との間隔は内側のものが0.7~0.9m、外側のものが1.4~1.5mであった。この小穴列の用途であるが、現時点では確定的なことは論じる環境にない。しかしながら誤解を恐れずに私論を述べることとしたい。いずれの小穴列も屋根を葺き下ろす作業に利用したと考えている。外側の小穴列が葺き下ろした屋根の延長が接地する部分で、内側の小穴列が軒先にあたるのでないか。つまり、外側の小穴列は屋根の傾斜を出すために機能し、内側の小穴列は屋根の軒先の長さを一定にするために機能していたのではないか。ただし、現状では住居の竪穴周辺の小穴列を検出した事例が管見の限り見当たらぬため、資料の増加を待って再度論考したい。

溝状遺構

調査区を南北に横断するように検出した。これまで孤塚遺跡では中世の遺構は知られていないかったうえ、単独での検出であるため周辺との関連は論及できない。にもかかわらず、今回は二つの興味深い事

象が指摘できる。

まず、この溝は北から南へと流下していたと考えられるが、調査区の中ほどが浅くなっていることが指摘される。この浅くなっている部分は、地山が拳大の川原石を大量に含む硬い砂層で形成されていて、あまりの硬さに掘削を途中で諦めた感がある。水が流下すればその用を足したので掘削を中断したとすれば、この溝の用途は農業用水利である可能性が高かろう。

また、調査区の南端附近では、溝の中央附近をもう一段掘り下げているのが確認できた。断面土層を観察する限り、溝の埋没過程で浚渫時に溝を深くしたのではなく、2段に掘り込まれた状況で使用されていることが理解された。何らかの理由で、この部分から南側の水位を下げる必要が生じたのであろう。

竪穴状遺構

今回の調査区の中では、多数の風倒木痕と見られるものを検出した。そのうち平面形態が縄文期の竪穴に近いものは半裁して土層断面を確認のうえ完掘した。報告文中でも述べたとおり、土層断面の観察結果からすると、人為的な遺構である可能性は極めて低い。すべて風倒木痕とするのが適当であろう。

2SI10 出土遺物

今回、唯一まとまった遺物を出土したのが2SI10である。先に述べたように、2SI20の出土遺物は全体的に時期差が殆ど見出されず、ほぼ同一の時期の土器の組み合わせを提示している。器種は甕・鉢・大型鉢・高环がある。甕の資料を見ると、布留系の甕のみで構成されていることに気がつく。口縁端部は上方につまみ出して、布留系の中では比較的古相を示している。また特徴的なのは高环で、庄内系椀型高环と呼ばれるものである。今回出土した高环は、すべてこの庄内系椀型高环であった。脚部の資料は何れも円形の透かしがあるもので、8箇所に配置されるのを標準としているようである。

また、大型鉢が平底を呈している点も留意しておきたい。胎土や全体的な器形から判断して土師器の範疇と思われるが、比較的古い要素を残していると言える。これらが丸底の鉢（あるいは椀と呼んでもよいかも知れない）と組み合されている点も注意を要する。丸底の鉢の中には底部に平坦面を形成するものも含まれている。

これらを総合して見ると、古式土師器のII b期あるいはII a期に該当しそうである。（註4）庄内系椀型高环がある点を踏まえればII a期と言えそうであるが、甕の器面調整等を見ると、積極的にII a期とは言い難い。この土器群をII b期とすれば、当地域においては庄内系椀型高环がII b期まで残ることになり、福岡平野とは様相を異にすることになる。この点については詳細に論考する力量を持ち合わせていないため、今後の検討課題としておきたい。

註)

註1 筑後市教育委員会「狐塚遺跡」1970

註2 大牟田市教育委員会「大牟田市文化財調査報告書第22集「宮部遺跡」1983

註3 永見秀徳「弥生時代の住居」「図説南筑後の歴史」郷土出版社 2006 所収

註4 柳田康雄「土師器の編年—九州—」「古墳時代の研究 6 土師器と須恵器」雄山閣 1991 所収

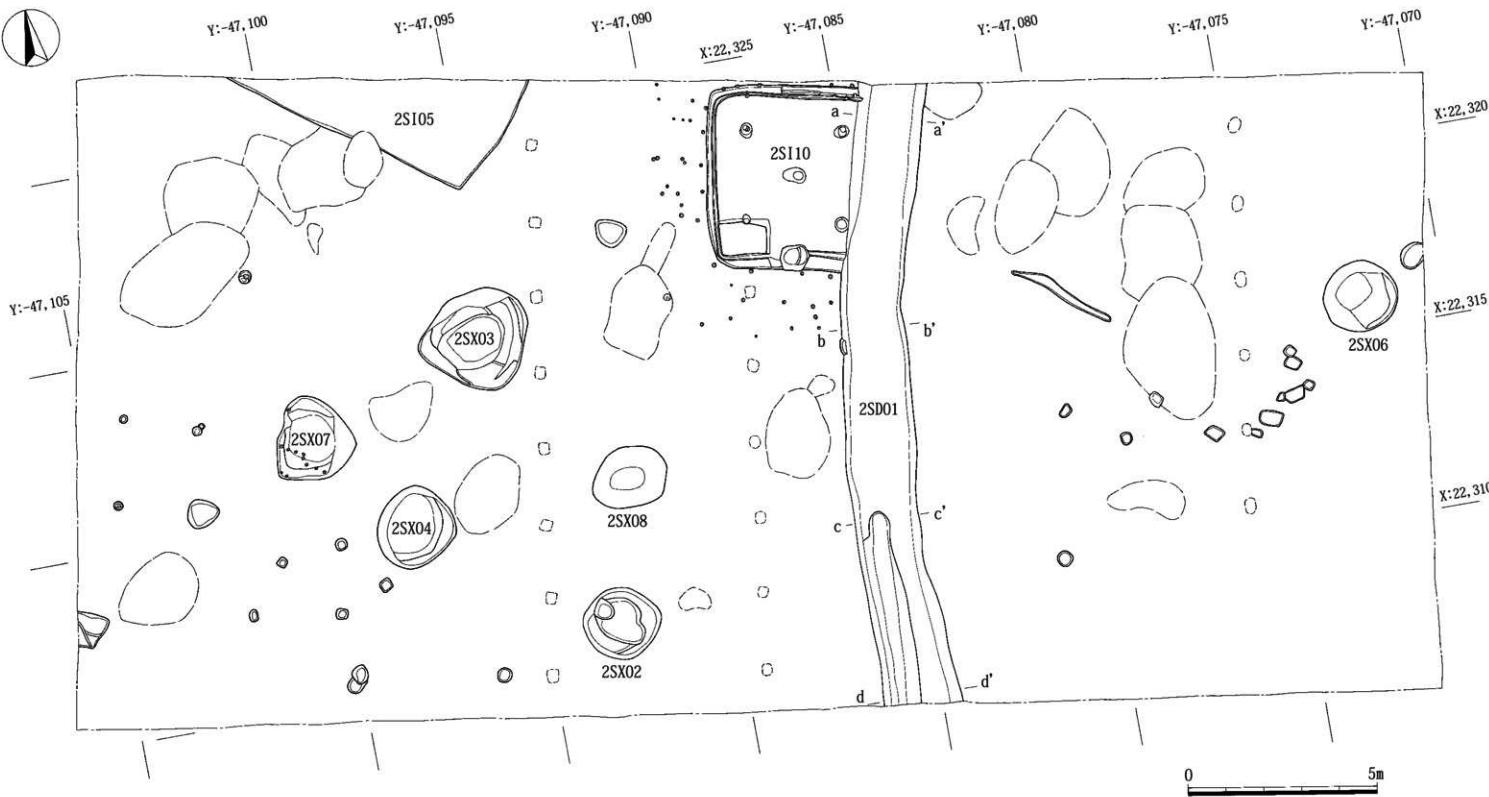


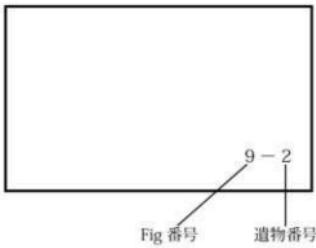
Fig.11 遺構全体配置図 (1/100)

P L A T E

写真図版

凡 例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりとなっている





調査区全景（上が北）



調査区全景（南から）



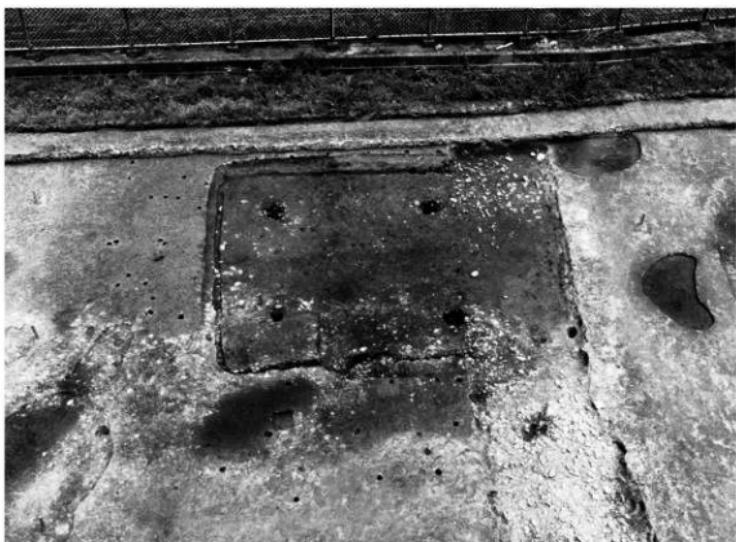
調査区全景（東から）



2SI05 完掘状況（南西から）



2SI10 完掘状況（上が北）



2SI10 完掘状況（南から）



2SI10 南北土層断面（西から）



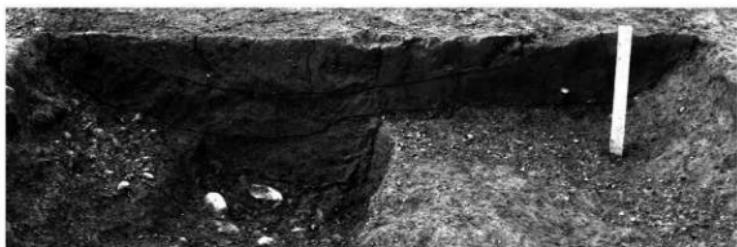
2SI10 東西土層断面（南から）



2SI10 屋内土坑遺物出土状況（北から）



2SD01 土層断面（分層前・南から）



2SD01 土層断面（分層後・南から）



2SD01 完掘（南から）



2SX02 土層断面（東から）



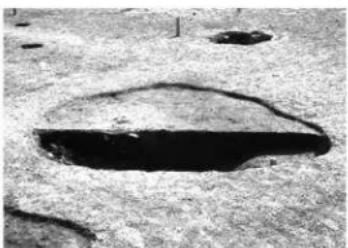
2SX03 土層断面（南から）



2SX04 土層断面（北東から）



2SX06 土層断面（北から）



2SX07 土層断面（西から）



気球写真撮影状況



作業風景①



作業風景②



8-1



8-2



8-4



8-5



8-6



8-7



8-8



8-9



9-10



9-11



9-12



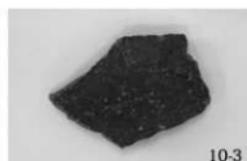
9-14



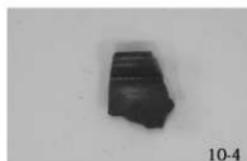
10-1



10-2



10-3



10-4



10-7

狐塚遺跡 II

福岡県筑後市大字上北島所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第 77 集

平成 19 年 3 月 31 日 発行

発行 筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井 898

印刷 大同印刷株式会社

佐賀市久保泉町大字上和泉 1848-20

